

高島小中学校におけるPTA参加型の歯科保健システムについて

○満野奈美、出口範子、有田信一
ありた小児矯正歯科医院

【目的】高島町では平成1年より、母子歯科保健（6ヶ月以降）、幼児歯科（3才以降）、学校歯科保健（6才から15才）において、それぞれ、年3回の健診と日常的なフッ化物の応用による蝕予防管理システムを実施して来た。当初は保健関係者主導型で実施してきたが、徐々に幼稚園関係者、学校関係者、父兄の関わりが増加し、現在は住民主体型へ移行しつつある。母子、幼児歯科保健と同様に、学校歯科保健分野においても、種々の歯科保健活動へ、父兄、教諭、児童生徒が主体的に参加できる「PTA参加型の歯科保健システム」への変更を試みている。

学校歯科保健分野では現在、PTAが参加している主なものは、1) 年3回の検診 2) フッ化物洗口の実施 3) 検診後の事後処置 4) 学校保健委員会の運営：父兄が企画段階から参加する 5) 学校歯科保健行事などがある。今回はこれらのPTA参加型の歯科保健システムと12年間の蝕の予防効果の経年的な推移を紹介する。

同時に児童生徒、父兄、学校教諭へ学校歯科保健に対する認識調査をアンケート形式で行ったので、併せて報告する。

【結果と考察】1) 小学校の年3回の健診には、父兄と担任が積極的に参加していた。2) フッ化物洗口の実施には児童生徒が主体的な役割を担っていた。3) 検診後の事後処置には学校の協力のもと、父兄が参加していた。4) 学校保健委員会の運営には父兄が企画段階から参加していた。5) 学校歯科保健行事には児童生徒と教員による企画と実施、および父兄が主体的に参加していた。6) 12才児のDMFT indexは14から0.5に減少した。

PTA参加型の歯科保健システムの構築には、住民への更なる普及啓発と住民主体のシステムの模索が必要と考えられた。

上顎犬歯の萌出異常を疑い先行乳歯を抜去した症例について

○岡 暁子¹、藤瀬多佳子¹、鍵下麻紀²、
北原敦子²、野中和明²
¹九州大学歯学部附属病院小児歯科
²九州大学大学院歯学部口腔保健推進学講座小児医学分野

【目的】

上顎犬歯は、萌出異常を起こす可能性の高い歯種である。上顎犬歯萌出方向の異常によっては、側切歯の歯根吸収を起こすこともある。従って、犬歯萌出に関しては萌出異常の可能性を早期に予測し経過を観察しながら対応することが望まれる。今回、回転パノラマX線写真にて上顎犬歯の萌出異常が疑われた症例のうち先行乳歯の抜去を行った症例について考察を行った。

【症例I】

9歳7ヵ月時（IIIA期）外傷を主訴に来院した際、回転パノラマX線写真にて上顎乳犬歯歯根吸収に左右差を認めたため、歯根吸収が遅延している先行乳歯を抜去した。リンガルアーチにより保険を行い定期的に管理したところ、犬歯は10歳11ヵ月時に歯列内に自然萌出を認めた。

【症例II】

幼時期より定期的な口腔内管理を受けており、9歳7ヵ月時（IIIB期）に回転パノラマX線写真にて上顎乳犬歯歯根吸収に左右差を認めたため、歯根吸収が遅延している先行乳歯を抜去した。その後定期管理が途絶え、12歳6ヵ月時に再来院した際、X線写真にて犬歯の埋伏および同側側切歯の歯根吸収を認めた。埋伏した犬歯は開窓・牽引にて萌出誘導し、側切歯はを保存した。

【考察】

小児の口腔内定期管理を行っていくうえで、IIIAおよびIIIB前期の回転パノラマX線写真にて上顎犬歯の歯胚の位置を評価することは萌出方向異常の早期発見のために重要である。上顎犬歯の萌出方向異常においては、先行乳歯を抜去することで犬歯は自然萌出する場合がある。今回はいずれも回転パノラマX線写真にて上顎乳犬歯歯根吸収の左右差から犬歯の萌出方向異常を疑い、早期に歯根吸収遅延である先行乳歯を抜去した症例であった。しかし、【症例II】のように先行乳歯の抜去だけでは犬歯の埋伏を回避できない場合もある。よって先行乳歯抜去後も、犬歯の萌出方向については定期的な管理が必要であり、適切に対応することが望まれる。